

文学博士西田龍雄君の「西夏語の研究」に対する授賞審査要旨

西田龍雄君は本邦随一の西夏語・西夏文字の研究者として知られ、その学位論文「西夏文字の分析並びに西夏文法の研究」（京大 一九六二年）は、文字の解読並びに文法の樹立に新生面を開拓したといわれる。本書はこれを増補しかつ新見見を追加したもので、上下二巻よりなり、全篇を五章に分ち、附録として西夏文の解読二例（一、涼州感応塔碑文、二、番漢合時掌中珠、上卷所収）、「西夏文字小字典」並びに英文摘要（下卷所収）を添えている。

第二章は「西夏語研究の発展」と題し（一一—一四頁）、居庸関刻文（一二四〇年）の解明を契機として一八七〇年以来、西夏文字の解読をめざして欧米・中国・日本において進められた研究の歴史を批判的に回顧する。西夏族は唐・五代の世を経て漸く強く、宋代にいたつて中国の西北地方に威を張り、李元昊の建国（一〇三二年）から成吉思汗に亡ぼされるまで（一二二七年）、約二百年の間独立を保つた。西夏語はこの民族の國語であり、西夏文字は彼ら自ら作成した國書である。この文字の命脈は、国家崩壊の後も百数十年間持続され、六千余字が國書として公布されて以來（一〇三六年）、三百年以上にわたつて文化的使命を果たした。しかしその後久しく伝承が断絶したため、最近一世紀にわたる学者の努力と資料の増加ともかかわらず、一貫した方法によつて西夏文字の表わす音形式（音価）を推定し、単語の意味および機能を決定し、文字の構成・体系を解明するにはいたらなかつた。

第二章「西夏語音再構成の方法」（一五—一五四頁）は、まず西夏語音再構成に西田君が利用した辞典・韻書類につき、その内容・性格・特徴を説明し、諸資料相互の関係を精密に検討している。完本としては伝わらないこれら重

要な資料の組織を徹底的に理解し、互いに相補わしめつつ、既知から未知へと進んで西夏音再構成への道を拓いたことは西田君の功績である。すなわち西田君は上記の資料を駆使して韻母の体系（母音組織）の再構成を試み、主核母音十三種を設定し、次いで声母の体系（子音組織）を再構成し、全体として声母五十種を推定している。なお西田君は西夏文字による反切の表示に言及し、西夏語の音韻研究に対するその重要性を例示している。

第三章は「西夏文字の分析」に当てられ（二二五—二二六頁）、西田君は西夏文字の成立史に触れ、契丹文字との関係を検討し、大体において西夏人の独創によるものと主張する。次に西夏文字の基本構造を精査し、基本文字と派生文字とを区別し、派生過程の原則を明らかにして五種のタイプに分類する。派生文字は一般に複合によつて成立するから、単純文字との区別を設け、単純文字はさらに文字を構成する最小単位すなわち三四八種の文字要素に分析される。文字要素の示す意義には、漢字の部首（冠・偏・傍）に相当するものが少なくなく、木部・山部・水部等意義明瞭なもの一二八部を列挙している。字形は文字要素の選び方と組合せ方によつて成立し、その組合せ様式には四四種の別が考えられる。漢字との類似はある程度認められるが、詳細に観察すれば相違点が顕著となり、西夏文字の構成は、西夏人独自の思惟方法に基づくものである。

第四章は「西夏語文法」と題し（二五三—二八八頁）、まず従来の文法研究の結果を概観し、文法の分析に対する西田君独自の方法と用意とを披瀝する。基本問題として西夏語の単語の様式を規定し、各形式類（品詞）につき、その形態・機能を自ら蒐集した実例に徴して明確に記述し、最後に文の様式を説く。西夏語がチベット・ビルマ語群の一員であることは、早くから知られていたが、従来は断片的で不完全な考察に終始していた。これに比し西田君の分

析は著しい進歩の跡を示し、ここに始めて西夏語の文法は、構造理論に照らして明快に提示され、独立の一言語体系としての輪郭を彷彿させるにいたつた。

第五章「西夏經典の系統」(二八九—三〇二頁)は、前四章と趣きを異にし、西夏語研究の重要資料たる蔵・漢仏典の西夏語訳を通覧している。まず天理図書館所蔵の諸断片につき、西田君の調査した結果を報告し、次いで広く西夏語訳経史を簡明に論述し、一回にわたり西夏語大藏經の出版が試みられたことを推定し、最後に各国に散在する経典の目録を添えている。

附録「西夏文字小字典」(三〇四—五〇七頁)は、西夏文字を文字要素(部)に従い細別して字書の形式に配列し、各文字の下には、西田君の推定による音形式、意味、韻書「同音」への参照等有用な説明事項を収めている。本字典に先だつNevskyの遺著「西夏語字典」に貴重な資料を負いつつも、内容は豊富・精密で創見に満ち、音形式・意味の推定に格段の進歩を見せている。本字典は今後の研究に最も確実な基盤を与えるものと考えられる。

以上を要するに、西田君は利用し得るあらゆる資料を駆使して、一貫した方法と精緻な分析とにより西夏文字の構成・派生の原則を確定し、音形式と意味との推定において前人未到の理解に達し、西夏語文法の骨子を組成し、かつ字典を編んで今後の研究に指針を提供した。尨大な資料の公刊を待つて、将来本書の細部が補足・修正されることは大いに可能である。しかし古来「字画繁冗」をもつて鳴る西夏文字の解説と、その担う言語の解明に、この程度まで成功したことは、近時言語学界の画期的業績の一つとして称讃に値する。